2025年7月6日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

礼拝という旅を共に

［民数記9章15～23節］

幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上にあって、朝まで燃える火のように見えた。いつもこのようであって、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。イスラエル人々は主の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。雲が長い日数、幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イスラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。雲が幕屋の上にわずかな日数しかとどまらないこともあったが、そのときも彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。雲が夕方から朝までしかとどまらず、朝になって、雲が昇ると、彼らは旅立った。昼であれ、夜であれ、雲が昇れば、彼らは旅立った。二日でも、一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にとどまり続ける間、イスラエルの人々はそこにとどまり、旅立つことをしなかった。そして雲が昇れば、彼らは旅立った。彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令に従い、主の言いつけを守った。

[1]　「幕屋」を作りながら移動した信仰の民

 新しい月を迎えました。礼拝の中では、今月と来月、つまりこの夏の間は、旧約聖書の民数記と申命記をご一緒に読みます。「民数記」というのは、民の数の記録、と書いて民数記ということなのですが、（英語では「Numbers」になります）それは、この書物の中に、2度イスラエル12部族の人口調査の記事があるので、そういう名前が付けられているようですが、元々のヘブル語の題は、1:1に「シナイの荒れ野にいた時」とあるので、「荒野にて」という表題が付いているそうです。その方がピンとくるような気もしますね。イスラエルの民は、荒野の旅をしたのです。本来は、出エジプトの出来事の後、「乳と蜜の流れる地」と言われたカナンの地は、数週間で到達できる近さでした。ところが彼らは何と、そこに入るまでに40年近くの年月を費やしたんです。正に想定外のことです。はじめの頃成人だった者は皆死んでしまい、完全に世代交代が起こっています。そんなに時間がかかってしまった一番大きな理由は、彼らの不信仰にありました。もうあまり大変な思いはしたくないと。ちょっと分かる気がします。旅をし続けるというのは大変です。引越しの連続ですから。ましてや、外敵と戦うということは本当に大変なストレスじゃないですか。「もう、このままでいいんじゃない？」と思っても不思議じゃないと思います。実際、そのようなつぶやきは何度も出てきます。

しかし、今日の箇所を見ると、そうではないんです。彼らの「荒野の旅」には乱れがありません。彼らが何を一番大事にしてきたのか、ということが良く分かります。彼らは出エジプト後、まず何をやったかというと、9章2節にあるように、「過越しの祭り」です。（これは新約聖書的に言うならば、「主の晩餐式」ですね。）神様が一方的になし遂げて下さったそのみわざを覚えることです。そして、彼らは、主の祭壇を中心に置く「幕屋」を作って、また移動して、また幕屋を作って…というのを繰り返しながら旅をしていたのです。そして、その移動の仕方というのがとても興味深いです。このように書かれていました。

「幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上にあって、朝まで燃える火のように見えた。いつもこのようであって、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。イスラエル人々は主の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。雲が長い日数、幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イスラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。雲が幕屋の上にわずかな日数しかとどまらないこともあったが、そのときも彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。」　…どう思われますか？大変な人数がいる訳ですよ。あり得ないような一致ではないでしょうか？驚きです。何が彼らの留まりと出発の合図（しるし）になったかといえば、雲です。雲ですよ。不確かなもののように思ってしまいます。しかし、こう書いていました。「夕方になると、それは幕屋の上にあって、朝まで燃える火のように見えた。いつもこのようであって、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。」この「雲」は、神様が生きておられる証し、その臨在を表していました。しかも「いつもこのようであった」とあるのです！彼らはこの「雲」を神様の言葉として受け止め、それに従順に従ったのですね。ここから、今何が私たちの信仰の生き方の基準（ものさし）になっているかが問われます。後で賛美歌「主と主の言葉に頼るは楽し」を歌いますが、本当にそれが「楽し」と歌えていますか？ということです。まず自分のスケジュールありきになり易い私たちです。勿論私たちは弱い体を持っているので、思うようにならぬこともあるし、ついつい信仰者であっても軽々に「健康第一」と言ってしまいます。

私は時々思うのですが、旧約のこのような移動の時、病気の人はどうだったのだろう？と思います。置いてけぼりだったとは考えにくいです。一緒に移動できるように支え合っていたのではないかと思います。23節、「彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令に従い、主の言いつけを守った。」とあるように、彼らの生きることの基準（ものさし）は、「主の命令」「主の言いつけ」つまり「主の言葉」だったのですね。そこには彼らの都合というものは見えないのです。これは凄いことです。

[2] 私たちは「サバイバー」

 私たちが旧約聖書を学ぶというのは、単に昔こういうことがあった、という歴史を学ぶということではありません。私は準備をしながら思わされたことがあります。それは、それは、私たちは、旧約の信仰の民の「末裔」（孫の孫の孫の孫の…という繋がりの中にある存在）なのだなということです。私たちは神様の民として、あのノアの方舟を通り抜け、新たな大地で歩みだした一群（ひとむれ）の末裔です。その後イスラエルの民は、奴隷状態になったエジプトから、神様のくすしき業によって自由な場所に導かれました。そして、更にその後、「乳と蜜が流れる地」に至るまで、40年も旅をし続けました。苦しい旅ですが、しかしそれは、不思議にも‟救い出されている”という事実を受けての歩みです。そう、信仰者は皆、「サバイバー」としての歩みをしている、と言っても良いのではないでしょうか？「サバイバー」とは「生き延びている者」ということですね。

 いわゆる「がんサバイバー」という方たち（若い方も多い）がおられます。その方々が夫々の思いを紡いで短歌にした本があるのですが、その中にこのような短歌を見つけました。

　**「蝉の声まぶしく耳をつんざいて歪んだ脳に『生きろ』と響く」（佐々木千津）**

この佐々木千津さんは、このような文を記しています。―「7月。暑い夏の日、脳転移を告げられた後の緊急入院でした。病室の窓から見えるのは、脳転移を告げられたどんより曇り空な私の気持ちと真逆な青い空。そして絶え間なく聞こえてくるのはミンミン蝉の声…。蝉の一生は短いと言われています。短い命の中、子孫繁栄のために力強く鳴く蝉の声は、告知後空っぽになった私の心と脳腫瘍で歪んだ脳に「生きろ」と鳴いてくれているような気がして、いつもなら「あぁーうるさい」とうっとうしく感じる真夏の蝉の大合唱も、入院中の私には、眩しく強く、まるで自分への応援歌のように聞こえました。」それで読んだ歌が、**「蝉の声まぶしく耳をつんざいて歪んだ脳に『生きろ』と響く」**なのですね。…人は、自分の「旅」を、（決して楽な旅ではなくても）歌にさえ出来るということは何と素敵なことでしょうか。（他の短歌も、週報の巻頭言に載せさせて頂きました）。

[3] 「ああ、楽しかった！」

 私は思うのですが、私たちは、もしかしたらこの命が与えられていなかったかもしれない存在なのかもしれないんです。でも本当に「サバイバー」、主によって命与えられ、またイエス様によって滅びから救いへと移され、尚生かして頂いている命だと思います。そこには「雲」がいつも共にあるのです！

　やはり脳腫瘍になられた方で、この方は佐々涼子さんというノンフィクション作家で、死を看取る人々を取材した本を何冊か書かれている方ですが、昨年『夜明けを待つ』というエッセー集とルポルタージュを出された後、56歳の若さで亡くなったのです。しかし、その本のあとがきは、ご自分の死を見つめながらこう書かれていました。この文章がとても心に迫って来るのです。

**―「平均余命14か月といわれている悪性の脳腫瘍「グリオーマ」に罹っている。昨年11月に発病して、あと数か月で認知機能などが衰え、意識が喪失する。**

**…横浜のこどもホスピス「うみとそらのおうち」には、重篤な病などを患っている子供たちがいて、キラキラと輝き、遊び、うれしそうにしている。先日、代表理事の田川尚登さんがこんなことを語ってくれた。「寿命の短い子供は、大人よりはるかに、何が起きているか、物事がわかっています。だから、『もっとやりたい』とか、『次はいつ遊ぶ？』と、わがままを言ったりしないんです。ただ、その日、その瞬間のことを『あー、楽しかった』とだけ言って別れるのです」。「あぁ、楽しかった」と…。なんと素敵な生き方だろう。私もこうだったらいい。だから、今日は私も次の約束をせず、こう言って別れることにしよう。「ああ、楽しかった」と。」**

素敵だなと思いました。そして、信仰者は本当に最期に「ああ、楽しかった！」と言いながら、主の御手が待つ場所に「引っ越し」させて頂けるのでないでしょうか？ その日が来るまで、荒野の旅を進んで行きましょう。神様が行けと言って下さり、或いは神様が今はここに居れと言って下さます。この主が責任を取って下さるのですから、ある意味楽しい旅ではないでしょうか。そして、今私たちがどこにいるのか、それを忘れないように、旅の一理塚のように、日曜日ごと、主の復活日ごとの礼拝をご一緒に捧げて参りましょう。お祈り致します。

第一コリ10:13 「神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていて下さいます」。このお約束を信じます。新しいこの月も、生かされている者、赦されている者、遣わされている者として歩ませて下さい。「雲」以上の人格ある主イエスをいつも共にあることを感謝致します。主の御名によって。アーメン！